

新潮文庫

人 邦 異

カ ミ ュ
窪 田 啓 作 訳



新 潮 社

Title: L'ETRANGER

Author: Albert Camus

Originally copyrighted by Editions Gallimard

Copyrighted in Japan by Shinchosha through the arrangement with
Bureau des Copyrights Français in Tokyo



異 邦 人

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 赤 114 A

昭和二十九年九月三十日 発行
昭和四十一年五月二十日 二十六刷改版
昭和五十年六月三十日 五十一刷

訳 者 窪 田 啓 作

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Keisaku Kubota 1954 Printed in Japan

新潮文庫

異邦人

カミユ
窪田啓作訳

新潮社版

異 邦 人

第一部

1

きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から電報をもらった。

「ハハウエノシライタム、マイソウアス」これでは何もわからない。恐らく昨日だったのだろう。

養老院はアルジェから八十キロの、マランゴにある。二時のバスに乗れば、午後のうちに着くだろう。そうすれば、お通^{つや}夜をして、明くる日の夕方帰って来られる。私は主人に二日間の休暇を願い出た。こんな事情があったのでは、休暇をことわるわけにはゆかないが、彼は不満な様子だった。「私のせいではないんです」といつてやったが、彼は返事をしなかった。そこで、こんなことは、口にすべきではなかった、と思った。とにかく、言いわけなどしないでよかった。むしろ彼の方が私に向かってお悔みをいわなければならぬはずだ。が、彼が実際悔みをいうのはもちろん明後日、喪服姿の私に出会ったときになる。差当りは、ママンが死んでいないみたいだ。埋葬が済んだら、反対にこれはれっきとした事柄となり、すべてが、もっと公けのかたち

をとるだろう。

私は二時のバスに乗った。ひどく暑かった。いつもの通り、レストランで、セレストのところ
で、食事をした。みんな私に対して、ひどく気の毒そうにしていた。「母親ってものは、かけが
えがない」とセレストは私にいった。私が出掛けるとき、みんな戸口まで送って来た。エマニ
エルの部屋へ、黒いネクタイと腕章を借りに登ってゆかねばならなかったから、私は少々目が回
った。エマニエルは、数カ月前叔父^{おじ}をなくしたのだ。

私はバスに遅れないように走った。私が眠くなったのは、きっと、こんなにいそいだり、走っ
たりしたためだった。それに加えて、車体の動揺やガソリンのにおいや、道路や空の照り返しの
せいもある。ほとんど車の走るあいだじゅう眠り続けた。眼^めがさめたときには、軍人に寄りかか
っていた。彼は私に微笑して、遠くから来たのか、と尋ねた。別に話したくもなかったから、私
は「そうです」といった。

養老院は村から二キロのところにある。私はその道を歩いた。すぐにママンに会いたいと思っ
たが、門衛は院長に会わなければならない、といった。彼の手がふさがっていたので、しばらく
待った。その間じゅう、門衛が話しかけて来た。それから院長に会った。その事務室で彼は私を
迎えた。小柄な老人で、レジオン・ドヌールを着けていた。明るい眼で、彼は私を見た。それか
ら私の手を握り、どうして手を引き込ませようかと困ったほど長く、離さずにいた。彼は書類の

頁をめぐって、「マダム・ムルソーは三年前にここに来られた。あなたはそのたった一人の御身寄りでしたね」といった。何か私をとがめているのだと思い、事情を話し出したが、彼は私をさえぎって、「弁解なさることはありません。あなたのお母さんの書類を拝見しました。あなたにはお母さんの要求をみたすことができなかったわけですね。あの方には看護婦をつける必要があったのに、あなたの給料はわずかでしたから。でも結局のところ、ここにおられた方が、お母さんにも御幸せでしたろう」「その通りです、院長さん」と私はいった。「ここには同じ年配の方、お友だちもあつたし。そういう方たちと、古い昔の思い出ばなしをかわすこともできたし。あなたはお若いから、あなたと一緒にでは、お母さんはお困りになったでしょう」と院長は付け加えた。

それは事実だ。家にいたとき、ママンは黙って私を見守ることに、時を過ごした。養老院に來た最初の頃にはよく泣いた。が、それは習慣のせいだった。数カ月たつと、今後はもしママンを養老院から連れ戻したなら、泣いたろう。これもやっぱり習慣のせいだ。最初私がほとんど養老院へ出掛けずにいたというのも、こうしたわけからだ。それに、また日曜日をふいにするようになるし、——バスに乗ったり、切符を買ったり、二時間も歩いたりすることが面倒なせいもあったのだが。

院長はなおも話し続けたが、私はほとんど聞いてはいなかった。やがて、「お母さんにお会いになりたいでしょう」と彼がいった。私は何もいわずに立ち上がった。彼は先に立って戸口へ向

かった。「死体置場の小部屋へ移して置きましたから。他のひとたちに刺激を与えないようにするためです。在院者の誰か一人死ぬたびに、他の連中は、二、三日神経を立てます。すると、こゝとが面倒になるのだ」と、階段で彼は説明した。われわれは中庭を横切った。そこには大勢の年寄りがい、少しずつかたまり合つて、しゃべっていた。われわれが通るとき、彼らは黙ってしまつたが、われわれが通り過ぎると、またおしゃべりがはじまつた。ぺちやくちや、ぺちやくちや、鸚鵡のおしゃべりみたいだつた。小さな建物の戸口のところで、院長は私と別れた。

「ここで失礼します。ムルソーさん。御用は何でもおっしゃつて下さい。私は事務室におりますから。原則として、埋葬は朝の十時と定まっています。あなたもお通夜をなされるでしょう。それからもうひとこと、お母さんはよくお友だちに、宗教に則して埋葬されたい、と希望をお漏らしになつたようです。手はずは万端整つております。ただそれをあなたにお伝えしておきたかつたので」私は彼に礼をいつた。ママンは、無神論者ではなかつたが、生きているうちは決して宗教のことを考えていなかった。

私はなかへ入つた。大層明るい部屋で、石灰が白く塗られ、一枚の焼絵ガラスが入っている。椅子とX型の台が置かれていて、部屋の中央に、その台の二つが、ふたのしてある棺をささえている。申しわけばかり打ちこんだネジが、きらきら光り、くるみ塗りの板からとびでているのだけが眼についた。棺のかたわらには、どぎつい色の布を頭に巻きつけた、白い上っ張り姿のアラ

ビア人の看護婦が一人いた。

このとき、私の背後に門衛が入って来た。走って来たに違いない。少し吃りながら、「こいつはふたがしてあるが、あんたが御覧になるなら、ネジを抜きましょう」という。彼は棺に近よったが、私は彼をひきとめた。「御覧にならないですか」というから、「ええ」と私は答えた。彼はやめた。こういうべきではなかったと感じて、私はばつが悪かった。ちよつとして、彼は私を見つめ、「なぜです」と尋ねたが、いかにも不思議だという様子で、別に非難の色はなかった。「理由はありません」と私はいった。彼は白いひげをひねりながら、私の方を見ずに、「わかるよ」とはつきりいった。明るく青の、美しい眼をしていて、顔色はやや赤味がかっていた。彼は私に椅子をすすめ、自分も私の少しうしろに腰掛けた。看護婦が立ち上がって、出口の方へ向かった。このとき、「あの人は腫物はれものができているんだ」と門衛が私にいった。私はわからなかったのだ、看護婦を眺めた。眼の下に繻帶ほうたいをしていて、それが頭を一まわりしているのが、わかった。鼻の高さで、繻帶は平らになっている。その顔は、繻帶の白さしか、眼に映らなかった。

看護婦が出て行くと、門衛は「あんたをひとりにしよう」といった。自分がどんな仕ぐさをしたか知らないが、彼は出て行かずに、私のうしろに立っていた。この私の背中の人影が、私は氣になった。部屋には午後の終わりの美しい光があふれていた。二匹のモンクマバチが、窓の焼絵ガラスにぶつかって、うなっていた。そして睡氣ねむけがひた寄せて来るのを感じた。門衛の方を振り

向かずに、私は「ここに来てから大分になりますか」といった。即座に彼は「五年でさ」と答えた。まるで、ずっとこの問いを待ち受けていたかのように。

それから彼は大いにしゃべった。この男に、マランゴの養老院で、門衛として終わる、とでも前にいいでもしたら、定めし妙な顔をしただろう。彼は六十四歳で、パリっ子だった。この時、「ああ、あなたはこの土地のひとつではないんですね」と私は彼の言葉をさえぎった。それから、院長のところへ連れてゆく前に、彼がママンのことを口にしていたのを思い出した。——いそいで埋葬せねばならない。野原は暑い、この地方では特に暑いから、と彼はいつていたのだ。また、この男は、自分が、かつてパリで生活したことがあり、パリ生活を忘れかねている、と私にうったえたのも、そのおりだった。パリでは三日、時には四日も、死者と一緒にいることがあるが、ここではその暇はない。柩車きゅうしやを追うて走らねばならぬということしか考えられない。あのと、女房が門衛にいった。「お黙んなさい。この方に申し上げるべきことじゃないよ」老人は赤くなって、申しわけをいった。私はなかに入って、「いや、構わないよ。構わないよ」といった。彼の話は正当だし面白い、と思った。

死体置場の小部屋で、彼は困窮者として養老院に入ってきたのだと私に告げた。まだ役に立つと思ったので、この門衛の仕事を申し込んだのだ。要するに彼は一人の在院者にほかならぬ、と

いうことを私は注意してやった。彼は、違う、といった。自分より年少の者も相当いるのだが、その在院者たちについて語るとき「あの連中」とか「他の連中」とか、もっとまねには「老人連」とかの言葉を使うのが、ひどく印象に残った。しかし、それはもちろん同じことではない。彼は門衛なのだし、ある限度において、彼は他のひとたちの上にちからを及ぼすのだ。

このとき看護婦が入って来た。夕暮が、にわか降りて来た。じきに夜が焼絵ガラスの窓に厚くかぶさった。門衛がスイッチをひねると、急に光がはねかかって来て、眼が見えなくなった。門衛が食堂へ行って食事をするようにすすめた。が、腹がへってはいなかった。そこで彼はミルク・コーヒーを持って来ようと申し出た。私はミルク・コーヒーが大好きだから、承知した。しばらくして彼はお盆ぼんを持って戻って来た。私は飲んだ。今度は煙草たばこをすいたいと思った。が、マンの前でそんなことをしていいかわからなかったので、躊躇ちゅうちよした。考えて見ると、どうでもいいことだった。私は門衛に一本煙草をやり、われわれは煙草をくゆらせた。

しばらくして、「あの、あんたのお母さんのお友だちも、お通夜に見える。そういうしきたりなんで。椅子とブラック・コーヒーをとりになきやならない」と彼はいった。明りを一つ消していいかと私は尋ねた。白壁のうえの、光のきらめきが、私を疲らせたからだ。彼はそれはできないといった。配線がそういう風になっていたのだ。全部つけるか、全部消すかだ。私はもう彼の方へ大して注意を向けてはいなかった。彼は出てゆき、戻って来て、椅子を並べた。その一

脚の上に、コーヒー沸しをまんなかにして、茶碗ちやわんを積み重ねた。やがて、彼は、ママンの向こう側、私の正面に腰をおろした。看護婦も、部屋の奥に、背を向けて、腰かけた。彼女が何をしているのか、わからなかった。が、腕の動きようからして、編物をしているのだろうと思われた。穏やかな陽気と、コーヒーで体が暖まった。開け放たれた戸口から、夜と花とのにおいが入って来た。少しうとうとしたと思う。

すれ合う音で、眼がさめた。眼をつぶっていたため、部屋は、よけい白い光にきらめくように見えた。私の前には、影ひとつなかった。どの物体も、どの角度も、いずれの曲線も、眼を傷つけるほど鮮明に描き出されていた。ママンの友だちが入って来たのは、この時だ。全部で十人ばかりで、黙ったなり、このまばゆい光のなかへ、すべりこんで来た。彼らは腰はおろしたが、どの椅子も全然きしむ音を立てなかった。私はこれまで人間を見たことがないみたいに、彼らをよく見た。顔付きや服装のどんな細かな隅々すみずみまでも、見のがしはしなかった。けれども、声が耳に入らなかったのも、現実に彼らがそこにいるとは、信じにくかった。女はほとんどみなが前掛けをしていた。胴体をしめつける紐ひもが、つき出た腹を一層目立たせていた。私はこれまでばあさんたちがどれほど腹がつき出ているか、気に留めたことはなかったのだ。男の方は、ほとんどみんなやせて、杖つえをついていた。その顔だちで注意をひいたのは、そこには眼らしいものが見つからないということ、皺しわまた皺のまんなか、わずかに、にぶい光があるだけだった。彼らが腰をお

ろしたとき、大部分は私をながめ、窮屈そうにうなずき、齒のない口で唇くちびるを深くかみしめていた。彼らがあいさつをしたのか、単なる習慣的な痙攣けいれんなのか、私にはわからなかった。やはり彼らは私にあいさつしたのだと思う。このとき、彼らがみんな、私の真向かいにすわって、門衛を囲んで頭をゆすっているのに気がついた。彼らが私を裁くためにそこにいるのだ、というばかりの印象が、一瞬、私を捕えた。

すこしたって、女の一人が泣き出した。彼女は二列目で、仲間のひとりの陰にかくれて、私にはよく見えなかった。小さな声で、規則的に、泣いた。泣きやむときを知らぬように見えた。他のひとたちは泣き声を聞かない振りをしていた。しおれ切って、陰気で、黙りこくっていた。彼らは棺だの、自分の杖だの、他の何かをながめていた。が、一点をみつめていたのだ。女は相変わらず泣き続けていた。その女を知らないで、私は大層驚いた。もう泣き声を聞きたくないと思った。でもそれをあえて女にいい出す勇氣はなかった。門衛が女の方へ身を傾けて、話をした。が、女は頭を振り、口ごもりながら何かいい、そして、同じ規則正しさで泣き続けた。門衛がこのとき私の方へ来て、側にすわった。かなりたってから、私の方を見ずに、彼はこう教えてくれた。「あの女はあんたのお母さんと親しくしていた。お母さんがここではたった一人の友だちなので、もうこれで友だちがなくなってしまうたといっているんだ」

私たちは長いことこうしていた。女の溜息ためいきやすすり泣きもだんだん間遠くなった。女はひどく

鼻をすすった。が、やがて、それもとうとう聞こえなくなった。私はもう眠くはなかったが、疲れて、腰が痛んだ。今となると、これらのひとたちの沈黙が、私を苦しめた。ただ間を置いて、奇妙な音が聞こえたが、それは何だかわからなかった。しまいには、数人の老人が、頬の内側をしゃぶって、この変な舌打ちをやっていることがわかった。彼らは自分では気づいていなかった。それほど自分の考えのなかに引きこまれていたのだ。彼らのまんなかに横たわるこの死者は、彼らの眼には何ものをも意味しないのではないか、という気すらした。が、これは間違った印象だった、と今では思う。

門衛の手で配られたコーヒーを、われわれはみんな飲んだ。それ以後のことは、もう知らない。夜が更けた。ふと私が眼をあけて、老人たちが互いにもたれ合って眠る姿を見たのを、覚えている。ただ、一人だけ、杖を握りしめた手の甲にあごをのせて、まるで私の目覚めるのを待っていたかのように、じっと私の方を見つめていた。それからまた私は眠った。ますます腰が痛んで来たために、また眼がさめた。焼絵ガラスの向こうに陽がのぼっていた。しばらくして、老人の一人が眼をさまし、ひどく咳いた。彼は大判の格子縞のハンカチのなかに痰を吐いた。痰を吐くたびに引きむしるみたいだった。この老人のおかげで、他のひとが眼をさました。門衛が出掛けようといった。彼らは立ち上がった。このやっかいな通夜のために灰色の顔をしていた。出てゆくとき、驚いたことには、ひとり残らず私の手を握った——まるで、一言もかわさなかったこ